



五

元

集

拾

遺

頁

14
3157
16(4)



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a dark ink on aged paper. A prominent red circular seal is stamped over the middle of the page, containing stylized Chinese characters. There are also two faint red rectangular seals at the top of the page.



44
3157
16
(42)

Vertical handwritten text on the right page, possibly a signature or a list of items. The characters are written in a cursive style.

晋子一世の奇句ハ二とく々五元ニ
はくせりといハも奥阿の自画ハ
或言の句をアハあハ一汁百遍ハ
破吟又ハ梅巷の曉旅店の昏ハ
もも是とハしてハねるおと人ハ
ハこれをもてハやして第又ハ物
よハめ吾家この青檀とよハを
こころれあハしハさハハハハ
編てまハ一書とハハハハ

坂東藏書

北村書

五元集

五元集拾遺

春之部

日の春をさすかり一落此安
年之也家中の礼を早月
松のさハ伊勢の家ハ人ハ誰
神明阿ハハハハハ
行合ハ松もハハハハハハ
落ハハハハハハハハハハハ
落ハハハハハハハハハハハ

元日や月見多し月橋の春
くあやも南時紅表四天五
元日此炭くく十の指玉し

手_ニ握_ラ蘭_口含_ニ鶏_舌

ゆけり紫や白あやしく筆くめ
昨きの台野きくや去れおねひ

さゆはれ江の松とたふ万

紫のあましくおびきし

紫くすしと連歌お侍ふ志の

紫くすしと連歌お侍ふ志の



法本ふととたつる紫あかむん
なと

蓮葉の松くくあてとやう根れ松
海窟牛も雜草根れあうり

額黄金

月ふ冬見す一万枚と漢代の春

あ水く鯉のかど鈴涼くさよ

春五正月老

生死のむし一男とあまは後心

唯る秋のひれくくはは姫君

初夏也 瀬戸平あつ 新辰子より
世の中乃 栄耀も 皇とわけれ者
糸文の四判 冬来より 亥子此間

蓬萊の瀧

鳴きよ 終之の書院此かやば

福祿壽の瀧

長さ百や 年此がら乃 新法作

宝引の瀧

保昌、ちりり 引がく 胸ふく

松より やまのさくら 満水すむ 瀧
花さかた 苔よ 及上の 畚か 汲し
吾れ 吾か 汲く 能く 公の ことを 祈

若菜

傘持 冬は けしき しい ちと しい 菜は
菜は 冬 迫し 白魚を 吾れ 川に 好く 入
けしき しい の 七種 打冬 菜は かくん
うり 冬 藎 藎よ 小里の 朝若菜

大根の画瀧

兵乃 しい かくん 文 かくん 子れ 日

あまの須紙うけぬ帳の之取目

けり冬陸月十日内田市に傳ふ
家より帳のなましよかきしとや

梅柳

さす枝れゆきとくもあやゆるの梅

藤之はる人下

古江へ梅柳へ入きよかきふ若

白玉改名 詞出さるるか

白玉の向れ隣子やむめと星

梅小冬うらもさる白懐とく

けり又冬うらもさる白懐とく

小袖とるやうけ自くむ免の妻
若の梅振いりまわしきるる

芭蕉翁百ヶ日懐旧

雲の梅まきやむししのむし

詞書略

三日月比傘あやかし一園の梅

詞書有今略

鏡のこけ巻了る眼の柳りか

曲もくを曲くすかきぬ柳り

あらしんす不持の掛物自画讃

凡がうふまゑに由少於柳うふ

山更上京

貫さしもつゝ梅々柳手柳

傾諱の韻

春柳此額の梯や三ヶの月

鶯

鶯うす長刀か糸あけし
うくひすの暖をしきりくす
鶯うはくく笛吹おこせ無難
うくひあや氣ちうけ園のひぬ

あさしはく

雪の子冬子あしりり之右邊
雪消あふ富士をたふかふを肥う
枚紙くふ角と見する雪向は
すかきほみ袋さす足よ雪のふ

六函の意

近隣意京所此猫かよひりり揚屋丁
寄弁意埋くもつゝをの候やきりり弁
幼意 ちくまの百目あま子小別意は
寄寺意 柏木乃柳をよせりあうり猫

思他意飯くへん君の方へと新松梅
疑魚 花の夏胡蝶子一似り辰よ
人ふこまきりの粉とさうけし
年少りふるさめりあへす思ふ

吉原の初年

初年や賽後よみり芝ぬる
初年ふきののりこれ例とさう
のゆ子を逢ふ夜終りて
の字より習ひあそびやう山
山の溜りてさうす入りか

川燕^{ササ}編さす邪人と見せり
帰る原糸はふるも古くやあま

授記品無有魔事

くまうしうさうく彼原の夕日紅
不生ふ滅れんを
海棠の舞と情を流る人像
伶人れ門あつりや春の声
世の中長何んがき難き声

惜春

梅らるや心と暮れん風中

かみしりや江戸とて多き如風巾

支那のき地のはろきしりまらるお

白川の園より見返すいりたけり

白奥露命

月と夜お生イッてデ雪と奥に腫園

ふ奥のまかりりたよの川けき

画攢

浦清りきりりのまきり露此声

引くして暮とくこのふき此弱

駒とたけり意見る傍ふ露此だ

すしきも揚や清りや清りし

泥龜の膝とくもくく去りて

遮りすまぬまきりや庭の枕

東潮海守見也

出たりや人並世活と連衣

屋ぬ入やもぬいふ流りか流り

鶏合

炭喰のきりふきまぬ新しひ

毛衣り服とくまぬと雪キヨクり

刻り入るくも死冠と筆

老翁此よりおまやさぬ固本丹
後足とひくさく同のほろくか

沙干

貝^{バイ}はくや白洲のまは流は松

貝く貝とむきつらと

あさく貝むくくくの奴くくひぬ
夏沼や塩瀬ふよす於くく貝
子安貝二尺の浦と産湯くか
浪垂ふくくく嬴螺^{イノ}はかくくか
屋ふくくやくく上げくくは栗

海松くくや浪のくけくくは貝
すくく貝ききれ高濱くくく
くくくくく花をすめくくく貝
江橋や且船かくく沙干貝

雜

かつくくの神をくくくを扱は雜

くくくくくくくく

世をくくく酒くくく雑々雜
くくくくく雑のすくくは新あり
紙紙のくくくくくくく

死

穢のあつはるほふをみめを 穢ふか
 さくす指りふい目玉の志く人せと
 口ひらとを莫く吸はる穢ふ
 こまききしとく中一教も穢ふ
 京中一へ世のさくや飛ぶ穢
 勢田の表堂

山穢血を泣くこの穢子くふ
 是も穢ふ翹彼さくく山くさくん

山穢流さひりき穢あらん
 浦人の死ととらふと
 教時とゆふ買む穢さく
 去丸の車了る穢人やふ穢
 穢さくけふ穢は穢の穢と穢
 穢ふと穢穢穢さむく山さく
 穢ひらと穢ふ穢の穢さく
 大佛膝さくむ穢穢穢乃穢
 匠坊や穢のうけく穢穢穢
 穢利穢人穢穢穢穢穢

庚申の雨と不登る
けしきと人々也さるる子えりお

讀莊子

彼是冬汽雪の傍々其のうを
花多もつうとあふ舞舞は
かんさやちりり花を
子下けくやうふが
神力品現大神力
法の子ちるやさるをさるる

憶芭蕉翁

月をわや海陽の寺社殊く

代進

彫^り笛^の遠^く兼^て花^は晴^{せん}浮^せか
屋^形舟^子子^え女^中お^より
湖^春と^いふ
流^るよ^む経^舟と^わり
名^もあり^や作^る意^又希^く花^を

櫻鳥

花^は比^や天^女負^まり^てく^る花^は

寒食二句

多し命や 富小 小 猫の目と怪む
と 案す 小 寒 命の 命を 自 成 焉

画韻

友のら 花を けりて 暇を いて 暫あり
山 吹の 葉を 玉を 玉を 玉を 玉を
きりり すす 小 豆腐を 切て けりて けりて
案 子 此 里の 案 子 乃 多 々 々
ある 人の子の名を 書きて
ことわり や 書ひ 子 あり 暫く ぬ

舟小 蚊の 案子 乃 多 々 々

あ よう 舟 の 案子 乃 多 々 々

何必 逃 杯 走 似 雲 げ 傳 大 雨 壺

け ね せ と ぬ と ぬ と ぬ と ぬ と ぬ と ぬ と

け ね せ と ぬ と ぬ と ぬ と ぬ と ぬ と ぬ と

俗 小 舟 小 舟 小 舟 小 舟 小 舟 小 舟 小 舟

三月 三

白 舟 小 舟 小 舟 小 舟 小 舟 小 舟 小 舟

夏之神

寄其已

白壳もなごりしとて流るる
は新ししよのトとや更衣
ぬぐもや冬千を祝喜衣久

東叡山院

傍正のまゝさひもへや多楓
く日みろくも浄瑠璃敷れ喜簾

時多

わとてすす二声めおき出馬
おれおろしてト加ケ標くらふりおとす

をと守るお寺お鬼おし子祝

山田市之丞

ちめくもゆすけもや郭台
祝喜も耳をひきておとす
お白くししと我と帰りの杜宇
詠んく警破付も物の戸お
あましくと務まらるるひびに
ほまも東すかお隆のうまわすか
おろくも好くすしし声を
郭公中入すそのまを流るる那

さしつゝ本免りて人知れず
藤崎の奥をけりてある
舟の戸や犬も地言と隠る者
ほつとて
ゆゑにさあも輪ふある浦
船
ふれとあつて夏のついでに
うゑの地ふふくさる船
書船此卵の中此免ちり
人のともせりし

人のともせりし
本質
み下を海をえすし船
舟船系がのとのやうな
系勤と
黒牡丹花や新しとの大言
むるや漂山と名中やうな
頃広北山うゑのつとん
嶺を少んでお卯の子を憎
海女家の義士等といふ

おもたの海と引くかきく

伏見此何系

杜多女セシムこのくありあり
何城の暮古屋さーやかりの若
けー此子朝粧をの咽とくか
新し隆冬風もこの中けむ
女子とくけむらる此頃須弥の

上野寺

灌仏や暮りむくお独玄
紙合ぬかるーやと世まふん

岩翁亭題送懈

みーあや清くくくく
経板や朝日す川石の細を此声
ある人の別業

内川や存れうき果おなく
枇杷の葉やととと角おき
秋去る也志げもにへー馬
馬士起てくるととある
麦おわー月とんとの秋
能化堂麦はく傍と氣を引

蟹の麦薩一と平と笈やとうや

豊年

地々味傳ふと多と落くむ瓜茄子
干瓜やたうらふくてもとまき瓜

祝産育

たうらふの皮より豚の結つみり

大所亭法言 何去暇

法のきんた笥美四もわくもくも

志あひくは法師の梅子けり

梅いづら胸伏の折姿よおわさ

壬二集

さきくはくち月さあさ
名とうへいふひすあさる
とあさる

さきくはくち月さあさ

さきくはくち月さあさ

かやとさあさ

ものぬれ懐甲や庫のうら

藤りのん驛るくともあさる

懐細沖ふ冬弟つ帆くや

幟之長者の夏や若牡丹

画韻

粽申ふもさみや芦の紫台蟹
こころなえぬらひんくうふあめ
根合中津地よむす花籃

廻文

けさくんのめや音の夏田沼

千山亭新定雪舟の絵子

隅の草と苔を新く六月雨
さみしきよやうし吉野とあまし

三味線や藤夜小くむ六月雨

蕨もかろくをかきくつさあは

題江戸八景

住くらすまの深川の松花雨五月
さきさきや湯の極赤山おけり
又月由や君の心はかきさき

江の鶴

熊雨の窟水は一由角へ行く
何を喜ぶすらん鳴くむ六月雨

傾廓

八之湯巾 かりきり げんや げんや げんや
旅人をあはれさるる

藤坂や園の五月 始めく馬

腰紙

藤すりく 腰紙を 友麻の 女御

自愧

扱あらしき 母を 扱あらしき 女御
多勢の 扱あらしき 女御

和古詩

只を 懐く 多勢を 煮く 扱あらしき

いそぐ 社園 例あらしき 女御

あしを 紙く 扱あらしき 女御

むつま へし 磨ひ 扱あらしき 女御

うま へし 磨ひ 扱あらしき 女御

あしを 紙く 扱あらしき 女御

扱あらしき 女御

川糸の淡

若州 小腰 へかき 女御

菱川小菘より仕出す着るよふ

字法

葉あふりてあつとくともては管ふ
 仲の戸小ふの葉うくふ管ふ
 葉あつとくまはれまう中か
 多舟や鞭うけつぬる葉根山
 田植うくま茶屋すまう角田川
 かねらうく友とわくくま田うく
 子乙女のようにまね顔に朝く
 招解れ早苗穂ふれ秋をわめ

會盟

交うのさあつて赤うけ菱料理
 ちふうく菱う招小木の葉汁

管前裁

隣官士近うの奥とまけの
 子とやう申いさうかた葉まを
 とくちて庭あ裁ま名付と
 小西此葉とまうまこれ色
 およとくうけつるう

海雲和布とや管の御義ま角豆

望海觀遊

海松此島や夕べの比の磯洲松

藻舎れ濱出と

海雲あやや月丸出みと巻ふか松

止波浦

地引すと巻の中ふくまる此夕

巻浦の権取押さりてけ橋の

下り入

帆とくろる鯛のふらふや巻る比

舟興

夕るやと巻る此の光り那

朝日に七と巻る此の光り那

夜に枕下郎やあつる此の巻

岩根と巻る此の巻

花女小むらさきと巻る此の巻

藻にたふや巻る此の巻

藻のふらや巻る此の巻

藻にたふや巻る此の巻

巻る此の巻

建長寺無詩俗了人

夏小詩をいふ俗にけ夏木之
 谷木の鬼をかきこもるも一箇
 年の年午此月午の日午乃
 時うけ入る
 駿馬埒小入新卯扶い
 日休辭しけり
 路小いけり
 つの向いかけひりそ夏月
 雲入る月や志流りも夏土の山
 夏の月帳と夜ふりく九百あ

市此海倉のつやさよ

出はくり葉あつるもれ帳をい
 夜讀書

帳をあつや枕しけり
 申の日もろ帳屋あつる
 夜早前ん帳帳か紙と入るる
 帳名名のりりり葉いぬすれ油
 群る志
 青の帳も枕とりけりハ森りか
 字長の句をりりり

橋此一二の是教とせしと
 むし白ふ花さく実さく陳皮さく
 蚊さく火さく夕影白く 橙さく
 松賀秋航岩城一語中 柳右平
 何さくやヤサハルと

蚊さく火さ杖第く 固家小
 佛骨表

去くく冬暈と折りく 韓退之
 射者中 奕者勝

禪子よりのさあさ 燕さく河

修徳く糸さく人眼さく

銭中

梁の暈とさく舞一馬地土
 暈さくは一舞おん夏の菊

云さくさけくて終日さく

撰直さく平妹志さく瓜作さく

母のりや又泣いさく言桑瓜

あさより 柳中瓜さく六皮さく

あさりの 橙糸のさく瓜の存

瓜の一花 文さく小略さく

けり花も非あやまのく瓜持糸

浅草川道地

冨土行や細代小火あきねのふ屋
白きふまきこま衣ややーし指
くまきく又早きくひかーし日記
明これのよれ木のきもとやとれえ
氷室山里葱れ紫白ーし日々料
不奪百姓膏腴とん文選の詞
百姓れまゆる油やーし酒

惘農

焼鎌の背申ふあつーし田屋よれ
紅糸買や朝見ーし花を夕日秋
登くやや猫れ多目くーしを思ふ
暮一しあくや六月甲くーし
百左のふおくくも先より川むき
白きととる菅くーし川價汁
三義とひかかひのよのほも
くね感より御階れ奇仙ら出て
鳥籠のふよーしあしきくく
のをあふまふのやーしちれ車の

林のうけ小御をかくしめりありと
かゝいも者此れはさるるくおま
りむく此老の奥小戸をひらき
あまふか非人きり麻蓮
一品の書坊より
日蓮よ木下衛子輝の唱く時を
空輝小吉系とのく折紙の形
木戸處とわらむ
輝と聞け一日唱くお此處
入湯の人木質とくりり子

輝の声すしらすあつる指小
鏡子と懐紙の表帯にして是れ
小かこむりて
飯粒をいかけもさるる輝の衣
視彼輝の貧者小衣をわくるを
祇園敵のかり金志はるふと
秋の葉とまきふは月の中庭に
舞天王の法橋不
里の子れあまよむむ報子

長叔談

叶作

傘よ蝶蓮のまきあがりむく那

詞古略

考一 湖蓮より淡と包まらる

得正観音像

ふ小蓮膠くちまを包む白ひけ

あまをばけ作ははる花の平受た

つともくとも庭山の交りとき

さけりらるるもや

あわくくまをくまもく白蓮社

浜坊の歌さくくもや蓮く那

蓮のまきあがり赤繻アハエとく新 暑く

蟻けの桐干 暑く 星の北

冠里公伝中 松山初入の時

川と早着や浦の昔屋此軸をたて

小女此帯ふくもまゝあつさくふ

信九市、持し 壺底に

朝比奈の紫屋へ入し 早着が

家舟のまきあがりかきよりみ

まきあがりまきあがりまきあがり

まきあがりまきあがりまきあがり

生れ松いりふ急まむ汗拭ひ
 死の海と汗のうきもあや夏中人
 山田悦亭
 汗濃きよ夜の宵縫れ申うき事
 身おろしむ一まぬ織も浮せうき
 何とぬ織結綿をききし紗の隙
 小所の譚
 腸けけく休むをくへう大くちこ
 かくけりのおききりしすぬをく
 くられ松子風の垣をる庭う那

うすよの風信日おくる 園蔵

所見

花うあう星り川急れ源の那
 翁の又よ那のすき色てみくら
 風よあしむすをくくくくく
 夫山の海く魚あくと源をうか
 夕サ原すしむ風の誓ふ
 涼の舟匠めり今一遊う那
 少年と女は信しそ死の香と

けふよ老るるを
夕十とみ

布袋の襷

夕十とみを子とも懸すか夕十

祇公日次の懸ととらあくる

河美垣陣利をひき守るは

芝木のすしをのきとるは

朝今ふ梅よしくあくる下す

夕十とよくを穿かせるは

けふとらとの集あはれのふ

夕十予晋子のふと

夕十

抱き重や妻くえく

曲の膝あふ湖水を思ひ

漣やあを衣とむむ

夕十

夕十襦やうはあくる麻

夏那や曠ととれ柄枚水

井ふくあふ海の女あひ

夕十

顔あけよ信ふと

夕十公能真也

日少やけく海のこぼるるはほろ鬼
 たるおまゝかまてはほろはほろと
 わらわんをまゝく人をほろはほろ
 ちかまのちかまお下涼や一か
 判後をまゝかまてはほろはほろ
 とくくくくく

けほろく一 ちかまはほろく氷も
 世ふありて西のちかまはほろく
 独りまよ腫の揃 雪はほろく
 夕まよはほろくまゝかまてはほろく堂

黄まゝくくくくくくくくくくく

烟雨村

夕まゝやほろひかまてはほろく
 申まゝくくくくくくくくくくく

雨中吟

白まゝくくくくくくくくくくく
 清まゝのまゝかまてはほろく
 夕まゝくくくくくくくくくくく
 申まゝくくくくくくくくくくく

夕なや家とさうりて啼一 家鴨
ハヤと川にけ嶮嶮とこの北岸
根挽のらすうたや川雪のま

望相弱

平らんま薄倉さうり日々
うらまも揚屋ふ似さうり
おとととさうりあさひさうり
はの戸むおき轟の崖う那

醉登二階

酒の瀑布は夏の九天うら
印や海やさうり北下のるる

廣のあまふ

すびつさうりさうり夏の炭俵
陣あま樹とすくさうり
先手をさうりさうり
何うさうり六月相と枯る人

市中のまほりさうり
秋おさうりさうり大鼓やま神ふ

後後

夏後内作の若れるより

秋の部

井の柳ふたふと相此一葉外

もれ幅一葉ふちうく相すこあ

雨山子のともと免 画多探雪

下り琴と筆と大報と後中

雨の半色一葉

若筆

けいけい相の一葉や筆此声

竹居ふまうつさく住りひらる

傍ととひらる

尺の筆より一葉一葉と由

ま日やぬく精れ一葉川

河云

空や秋時をさゆもく七言羅樹

父の想いしとふんふんすまふ

若筆の筆より一葉一葉と由

らとくくばりさととれとくハ一
 ろとくくばりハ一ととくとく
 妙感の感ふハ一ととくとく
 秋とくくばりハ一ととくとく
 梧枝亭にわがくハ一
 乾^ヤ兌坎震離^ス艮坤^一巽^一
 之や秋とくくばりハ一ととくとく
 也れよみりく下の字にわがく
 了んくとくはととくとくハ一
 秋夜話^{臣林}

雨^レ江^レふハ織^レや板^レの義^をあはむ

市偶

西例^一下^一於^一我^一お^一も^一や^一三^一日^一月^一
 貞女^一弟^一男^一於^一我^一お^一も^一や^一三^一日^一月^一

市中の因石

あはれや^一や^一し^一ん^一心^一人^一を^一并^一換^一子^一
朝野^一を^一呼^一て^一豊^一い^一し^一と^一あ^一る^一や^一予^一
 とく^一し^一ん^一心^一を^一り^一て^一
 藤^一ハ^一仙^一洞^一様^一を^一い^一れ^一ち^一ら^一う^一那^一
 あはれや^一や^一し^一ん^一心^一人^一を^一并^一換^一子^一
 朝^一貞^一よ^一志^一の^一志^一一^一人^一や^一並^一負^一帽子^一

すゝと画なるかけその後

あさりのや藤ふ出るまじし遠ある
幕下千三あふの瓜此二並
船白ふり川若出し一歩使
及心の書志のまじく恨む程垣

七夕

星をや人此心張瓜くしき
あし橋や待もまじく星
堂の母七中七夕の秋万
酒の秋此七件乃奈の勸を

早此夜よ花火細とく春をよ

三遷のりくは懐ひしちり
る煙と奇のりも一日
あつて七ふ奇とまじけい
とけい

又月や春をくみまも母の恩
栞買りひと川流すや天の川
書早よあふよ一ふをあふ
大切此おる明より天此川
明早や額まじく子鞠か

秋七種

夕星のなきわく花や女帯也

女さくしのんちくしてきりよ

きりうひはるを七夕にむ向州

よせしき

海辺曉雲

稀霧や朝暈しきるをふ又

海原のこまきしをかおひしよと

こまきれこしよきしつり結露の

暮のしらす柳子とくを早風は

七月十日此夜を歩ゆり合は桂子

柳子のくちをさとしをひらき

夏ととりし露骨のくさ萩の声

何とあり異なり

萩もくさ菅落るく刃しとを

又さ萩のさふわりのききと

ささ此夜を拾ひふくしりり柳

さふふ荊と西瓜よまきり借す男

半少きる娘師屋子さ女帯也

遍照の懐

信ふよ鞠のわづら女帝冠

籠舞あやしく舞速惑さそ

昔の如き此あひらぎ紙とくみか

舞うらむる男の推つとくみ

くけふらるる人

西瓜吟ふぬれ髪此後をさる

神仏くふ此を安まらるるあはれ也

沾徒餞別

鳥せくむし人の名うとくみしん

うらむとくみ見ん様のを先事ん為

芭蕉の葉も雀も角をかくしり

さる白よりかけしやむるあはれ

茅とくみあ雨と雨風の聲をさ

鑑素堂秋池

凡秋れ荷葉二葉とくみさる

茶の冬もしてまれ掃除や白芙蓉

盆會

かきくすふりれやさる銀のくみ

きくくすふりれやさる銀のくみ

右の二句又わりをくみ

陀羅尼品

浪と罪此秤や曇中ひ利

分却原

みろきや公限ふ尺白の彌藤
又月とくひく刺結と権領
一世の人此のひひと守と
能知此かくても屋々く大教と
生靈酒此下く物親仁と
あいかさこま入あまあーふ
あひかこさ此常をいふまこ也

切あふふ争ひを

親と子もさよまらや蓮賣
柳籠や声のぬりさる才子坊主
一長金渡をたろしてたけりホ
踊るく妻此を希ふ酒さくひり
とよひし名も優美びり角力丸

露

赤院のけすさくらんまあまこ也
船くるとまらく此まや園乃外
あ月やひくうはにま娘の子

子子為少多梅を名守招き
茶此けき吐志むる夜や影豆腐

芭蕉座の歌

是座を私教子濼しるさぬか
座の町妻吸り犬わくどなり

点乳子かろるる懐紙の奥小

二巻子手目とさきしる座か

宇治の山あり

川を帯やそそさくさくのけか滅
音収烟り糸うけくすまは浦

寂蓮

和方此骨核しり山の夕なり那

き海や浅黄小なりそ煙乃書

秋の心は座しる俗の座是ト

南流の具詞存ひありそ聖

田北玉川より冬西行上人の場并

わくと強りし糸

漏る井を名少か流りと秋此雨

七月五日工部三回忌あはした

智満作をよもあひて墓誌

浅州誓願寺念佛堂

三人の声おろくよお乃夢

中

すくろよおねびーさうま後茅

橋よろいさーと碑の書いすこん

ほろいして家やう此れまもろみち

元禄六酉仲秋海川芭蕉庵

返主の戸よ入し

し綿とるあ雪とらぬ生約山

一しこの書もろくくむ天保丁

翁およもあを造てあまの

めくろきふ

あまのりし荷分此文や天保丁

遊湯豆腐

然の湯の厚と薄さぬ豆腐は

土を先地の切おはるはとらふ

血を枕席よやまんやう一皆我

場子の心むさうしをたふす

みとたうりむいんくそ命を

なれまあふりけてあつーい

詞のこゝを強し一語もゆるさお
まひゆきとてさあ物すゝ愁
眠をさすやと

陣中の飛脚もおくや一の声
善此山幸々を床のすゝさ
あゆむとら床も戸もくん
芥の片よきことを纏あく小田の鮭
カコカはく人様の声と泊
さらゆふ世とすすふ籠り那
いづし性柔弱にてもは

潮をさすて名も死す編俗
字かりよふしと州すおむと
いづし

おくや一口茶子吞此の
おのしと粥飯白ふ根泊り那
月

おのしと七分にあく一音の月
細い花を江戸おけとてさ
ての金んま丸盤あわし月んか
おしら物まのまふもわつら

月不かりぬ波よふあやうき成家

河玄あふ略

夕月や今も筆おろし守口

河玄略

信濃小を老う子多ありく月の

仲麿の画讃

月うけや舌を帆おすく三三山

長柄又臺の記

もる月とむしーの橋お村月か

月と信也紙紙此小者茶言此下女

まふや信友あまの君と伯父

満百

何うぬの月よ成りり母れ新

娘おま丸を程と月えり柳

ほろろる報うらりりけの月

唐子れ片袖くく一月の雪

燦くく一はれをやまの月影

雪と松と画く

中候の君のちとふこの月

月れさき詩の真う山常う川成り

信と叫びつて

少使に託して冬月と云ふ

脚ゆゆる函谷やうふ新馬込

月日此粟氣痛葡萄つる此母恋

向ふく一権いの里此松をよる

後多材やふ齒ふらゆる之朝の表

いり粟子神やう核のたれいけ

深川新海川さうて

粟賣の玄園くから因おりふ

癸酉八月廿九日此直亡父葬

送の場くし萌心の想を懐

し四生の起別と云ふ系

一涙の中輝も来安と取らぬ

晴たちとらひいふこのを晴れた

程芥子少中を新くふ光らぬ

稲くや穀を握鼓芝草の中

松の尾の夜子さうゆいふと

堀らうくく層子松おとと

此まふふとくあす中よ志め

初うけり

けりぞく 都の古やあれ子持

松のまゝ花と吹あけし様草

東國風来古れ山のまゝ

まづ月

冷泉の涼教ふはあはる茶

草将十唱句

其表 不二坂 麿草

草 草 草 草 草 草

其軸 草 蠟燭 消来

石突 角仙屠角帯

只 笠 回 菌 獨 樂

燒松茸 松枝 菌 返 報

松茸 不 香 松 雪 漬

涼 草 草 山 雨 重

其賞 北 寛 小 松 茸

楯上の 祝 菅 崎 生 草

了

第の下 草のつらり 名の草

藤の木のやうなつとよ〜園の菊
千のれ菊を人れな字志れをし
柚のまや記と〜と慈菊のま

重陽

菊の所葡萄れ〜ふ志〜みり

千家の騷人百菊れ依信

草〜やと菊子詩人の質と賣カタキ

〜もみら〜金とらけて流るゆ

〜入〜ありある枝のむ〜菊

凹反風虎公十二回忌

菊れ〜やたづ〜まき後ほ

九月九日庭と拾ひる〜

〜や石と星ふ輝〜れあり

葉花錢別

友成と〜菊れ使〜搦〜

子孫の柚乃〜子れし自れ

十二夜

白鷺の養め〜ゆ〜子存れ目

〜のま〜お御と〜と子

浮の月松や〜〜に片れ庭

けしの子とふくくやなれ
 ねむし此物と粟よるべき
 家より外本三とをき一ほの月

鳥

木兔や百合よえりくゆりの
 仁き樹の片山くや笑ひ菟
 山く此戸よも忘るもあく柏
 妻はよとく稀負をとさる者

小鳥を長寄

アキくく小秋の中山や中

中村少公夫婦連入上

兼系一討

山をよとくさくくもむ
 新秋六向港

新秋六向港

まはるね唐のくくめや下紅紫
 義のつまるをやさるゆりて志家
 木葉の食葉を秋のあさか

新秋

丁度虫と申すを以て宜き書

九月を

福の松の形は秋を味は

慈園非

傾城の小奇を以て九月を

あまの部

夢よりうら月を以て娘を名にす所を

染めぬ色の中を以て所を以

神馬のまを以てありし所を以

今態を志すに法を以てし

園阿の繪

系山を以て結ぶてくくく

七回忌

七とせし志すにやいしくお

時雨の松

しる松やまの一圃の一ツ松

時雨度松私のお年一とせし

おとしる人にとしむる志すに

傍む流くゝ多と中こそ時由は
松糸のすまゝ向と凡そなる時あは
けり冬晋子夏ふもま八懐
空ふ流くゝとてのたありとと

風文之略

木くじしと世子拾は道如之卯栗
風とありぬ松糸のう川せ貝
芭蕉翁終焉此化ふ略
かきうゝと空子うくやや松皮む
ふくあふゝ葉山子にせなる鳥引

みくあふゝいゝ免ーや山のてすま

曲の筆と幻住庵ともみひひ文

公氣の原と不といふ椎の木と

すゝ流くゝもすまあ翁のまはな

玄窟を世平凡なるまよ干菜賣

画歌

松一本と食のあゝる花枯葉

坊主少き清乃心してくゝ少き清

坊主とくくはとと

坊主少き清乃心してくゝ少き清

朝辭の書あやこらむ業人夢
細代も大根望をとが免たり

あひな海

福天の衣れよりや仕切帳
子冬衣ぬ親いば休あり夷海
多と舟のかの道とくけりよおれ声
浪米城は火洞よりわくとおれの身
酒くさくさやまん刺りくおれの声

貞作新宅

け高を清原もきくつめておれ

美山炭刻る火着ると斧の出なり
垣火やと恙くけしいらく焼
火煙のうしそ麻替りよ葉を枕は
用舟の糖をそ浮世子破る細葉
砥つとくしよれ移るや納豆汁
立厩

冬移の豆下とかりんありとせめ
園守は張子もむ失くせり
朝嵐馬の園々り頭中
あまこも道極の花れ七日市

宿僧房

あまの形一圃かのおまほを葉
おんて一葉をとりくも柄うや
成るゆや互に此敷のうけ不
成り屋の算盤をさく少敷街
鳴子多末お明ふの枝を落
村子多そ此おいそし虎の汗

人の書む久たり一

此多譽此意とらよふすこぬり
はくくと登れ急やあや重と

七五ノ忌や自利よこつるか
草お真

夜無川 盗人犬やき川山
犬川くさる腐持白くり里お真
菰一葉くさやと今此ゆあ鳥
龍尼世市川之味を統す

夜学子感
氷川すすやとよと氷くあふ花筋

北雪氷の枝や燈燈灯蓋よねを
長倉割けし道一人のまの

月小酒賣不許入内と云

三のわし

有客の恨みと云うは

妨むとやふも

町神と云ふ所のひ

貞徳翁五十年忌元禄十五

年壬午震月十九日懐旧乃

節と云ふは

震月十九日為候示黄門光国

一 卿之治系亭題周山之佳景

一 此の治系亭は

田の青山ありと云ふ

此の破能治と云ふ

二 清水寺喜ね

三 権左衛門や

六角堂の子堂小町

三 耕作の治系屋

九分とらふ多分屋小苔とらへる屋
はぬりてく大根ササ根ふりおと
川へ枯る梅の漱とらへる

根深ひく多此子苗やあやめ竹

四 黒木此中茶屋 けりすくす舟

生後とらへる堂舎樹林の
つよ子足強し如多分の所を
あけり新し内藤をくく新瑞
千一とらへるつとらへる

我や猿牛子高候つとらへる

五 夏栢 多栢とらへる夏平 此丁候
あり

夏草やあはれとらへる不破庇

六 西行堂 及ののほろ柳とらへる

彼は所より此山とらへる
とらへる岩より乃 菅生水とらへる
すゆとらへるはたけとらへる
とらへる

炭や山岩向ふか 此ほろとらへる

七 唐橋 多門とらへる出とらへる

はな海あつとらへる用とらへる
とらへる

長橋中 舞田中 ありとらへる

八八ののたれぬまをどあて

坊々新月の中も所よ清川あり

九河原書院くくあつて中書院

と評しての笑

八八代を河原中館此流子とる

十西湖くく先いいと流の中亭

よ入る所村白を惜むてりく

夏よ毎舟よ来りて西湖のあ

ふよとて東坂くくを次て

詩とあふ^澳新めくむまは橋小船

右十妻

系北出居炭のまを人を院名あり

松風や舟よ富生をゆく西屋形

院よ終て一舟の教系系島津

轂

妻ならぬ般りくみとお板衣

鉄炮のり流もくやあつとけ

もを切てよくあつて般の面

詩くゆを松に北河豚といふ

能ふく寸轂中くくはまの轂

又略す

系れ湯ふきささきもこ瓢汁
餅籾をさうさけんをて厨^{ツリヤ}り
只^{ツリヤ}袋うやうひきあいた字籾

を

とひきや大の面出す板れ垣
膳を落ふさけふや ちきれ 積
温能^{ツリヤ}ふり ち^{ツリヤ}佛^{ツリヤ}の^{ツリヤ}意

又畧す

上塚のまゝとくま^{ツリヤ}つ^{ツリヤ}を女

堀木のやうに務まやちきれ友

ア^{ツリヤ}七の畑れかひや^{ツリヤ}り^{ツリヤ}ん^{ツリヤ}の
序制をよしくう^{ツリヤ}簡^{ツリヤ}せん^{ツリヤ}や^{ツリヤ}

ち^{ツリヤ}ま^{ツリヤ}思^{ツリヤ}ひ^{ツリヤ}後^{ツリヤ}る^{ツリヤ}と^{ツリヤ}付^{ツリヤ}あ^{ツリヤ}へ^{ツリヤ}ん^{ツリヤ}の
とかく^{ツリヤ}化^{ツリヤ}と^{ツリヤ}属^{ツリヤ}お^{ツリヤ}よ^{ツリヤ}極^{ツリヤ}め^{ツリヤ}さ^{ツリヤ}ん^{ツリヤ}く

後^{ツリヤ}る^{ツリヤ}の^{ツリヤ}え^{ツリヤ}ん^{ツリヤ}み^{ツリヤ}あ^{ツリヤ}へ^{ツリヤ}ん^{ツリヤ}とい^{ツリヤ}ひ^{ツリヤ}て

汎^{ツリヤ}る^{ツリヤ}わ^{ツリヤ}さ^{ツリヤ}ふ^{ツリヤ}が^{ツリヤ}り^{ツリヤ}や^{ツリヤ}ー^{ツリヤ}の^{ツリヤ}意

ち^{ツリヤ}れ^{ツリヤ}日^{ツリヤ}の^{ツリヤ}声^{ツリヤ}は^{ツリヤ}一^{ツリヤ}膏^{ツリヤ}く^{ツリヤ}後^{ツリヤ}木^{ツリヤ}か
ア^{ツリヤ}ま^{ツリヤ}さ^{ツリヤ}り^{ツリヤ}の^{ツリヤ}麦^{ツリヤ}田^{ツリヤ}を^{ツリヤ}意^{ツリヤ}の^{ツリヤ}早^{ツリヤ}苗^{ツリヤ}か
ま^{ツリヤ}は^{ツリヤ}と^{ツリヤ}さ^{ツリヤ}れ^{ツリヤ}祓^{ツリヤ}ゆ^{ツリヤ}や^{ツリヤ}丸^{ツリヤ}合^{ツリヤ}ね

けしきも此の清きも 霊全も雪は
 在りては 小使を何如し
 板出し 雪より 柿入 栢袋
 雪はも 雪の掛菜のみお
 秘蔵の鶴は 雪をさしめ
 五人

雪はも 柿入 や 雪の味
 朝あさや 月雪 雪の味
 雪の味 雪の味 雪の味
 秋の味 雪の味 雪の味

極寒

雪の味 雪の味 雪の味
 伊勢の雪 雪の味 雪の味
 雪の味 雪の味 雪の味

雪の味 雪の味 雪の味
 雪の味 雪の味 雪の味
 雪の味 雪の味 雪の味
 雪の味 雪の味 雪の味

世をなすはけし 世一の心を
 義れしふしむ ちかひの心を
 七十を来 稀ありと
 やつこころ心 於るあり
 海平かかん 移るるも
 あらざるの 移るるも
 凍死忽死の 移るるも
 漫成五倫
 君臣有義
 家の子有るを 志すふる志

父子有親

能けや情を 親を尊ぶ

夫婦有別

夫とて妻とて 出ぬるを

長幼有序

長とて幼とて 子とて

朋友有信

君とて我とて 信を

大小の分 元禄十丁巳年

大を志す 志す

為よづりれお坊ふふしと昨を驚

舟町海一の画談

弟孝りや口とせむぢとる海一子
えいと起すやうなり良孝作
そは孝ゆき左の耳よありとく

店し物よりをす

輝拂や諸人うす極る陰成り
を若きもの餅はくをを鳴り
いさふし年の居る此よふきあり

酒債尋常往処者人生七十古来稀

詩わきんと年を貪り酒債カカテ引
流れや子年流るは此年の垢
年中の放下思ふくくも此言
豆とく川高れらちを笑ひり

乾元の話

長ふ秋れをくく近し得方丸

三律石粉煙燭此自画談

今くふ不圓十希や思ふ外
流れ年此あは世ふつとく
年此や只業年此油ひま

くちや海を渡るそのとくを聖國乃
ちりし伊弉諾の神を多岐の神と
りしゆらるるをひてそののしより
くちよやまは

並に於て及此小文や多岐此等

何事ぞてしむ位は居よハハハハハハハ
とく務るるをりんとて多岐とてし
世の中とてけあるるなり

妖なりし祇實しき作をりふ

大晦日福のりしとらり年とて

法玄國より破たるとして
非しとてふし大教とてし
りしし戸板めりたし餘の跡

りし年尔唾吐しむかきかき

聖代

主病おりし日しとて多岐大晦日

雜之部

十及の圖 画ハ略之

又此者異邦の佛澄淨淨十
牛とてあしし人向迷悟のりし
志ゆらるとして其書を和文は
多岐牛の声音故有く又及
ともとてあしし和文は

爰に十及の家を画後して
笑と万世は強きよの晋其角

尋牛

やこれありのいづれ月おし

呼牛

うたをさるあは道園てりもさるあ

隠牛

爰に扱ひ福ぬる病氣の起り

貧牛

仁系刺やと於るうへも幸男

廻牛

小便も管ふあやう五月う那

番牛

引くさす曉卒をかつせり

無牛

さうくす枕も床も物履き

事牛

何となくあは夜と引くをやをさ

送牛

さゆよの牛も危きなやまを

光半

りあしきうとんのをうめあふ

松冠里公名歌五之梅

五之梅

五之梅や真の洞へのうけちん

花（花）のまき千ぬ草や梅の處

村あれとまきくや岩根の松

九峰丸より官をばく聖路の

花（花）のまきくや岩根の松

五之梅よりに御り一匹の松れ

一子いめくこの名おわりよまき

花（花）のまきくや岩根の松

花（花）のまきくや岩根の松

花（花）のまきくや岩根の松

花（花）のまきくや岩根の松

花（花）のまきくや岩根の松

花（花）のまきくや岩根の松

盆會

花（花）のまきくや岩根の松

花（花）のまきくや岩根の松

い〜〜〜
と〜〜〜
す〜〜〜

馬書紙よ〜
あ〜〜〜

我北へ 柳梅柳
雪のむ〜

追加

あ〜〜〜
解所〜

天智天皇

あ〜〜〜
長〜〜〜

孫金〜

山嶺の顔の夜
画漬

解分や〜
山

妙法蓮華經

多ふりや法の蓮花華經

雪舟亭の花又ふまうく

何をしめる深ありくく系極

自画讃

掉席やまを紙を夏此法合

困より大工石りくむ路の梅

九條教浄下向

傳考よりよのふ見をむむ此心

法教場小馬休めりく大根引

法作及冬光のふくと大根引

後州久能の別南さんま

かして清色くわわを

ゆーさや清平男の膳安

旨延享四丁卯年秋八月全編校合

成

百萬音原

如...

...

...

...

...

江都書肆
日本橋通三丁目
竹川藤兵衛板

